修志

五

内閣文庫
和書
類
三五三四二
號
六〇
冊
三一一
函
二二
架
(五冊)

内閣文庫
番號 和 35342
冊數 60 (5)
函號 211 303

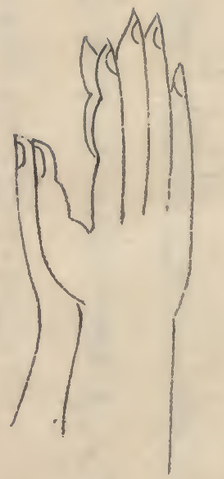
共六十

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

○四条人行体ハ法士号と称授ス事ハ何実ヨリ
正親町院伝授ヨリ出来ル歟ト謂ツテ敵ヒツヽ感意
ヲ以テ法士号ヲ称ツヽ行体氏ハ子ヲ四郎ト云利髮
シテ宗而ト称シ地冬斉ト号ス不審ヲ云滅四法
長云宗化ヲ名ヲ称ツヽ

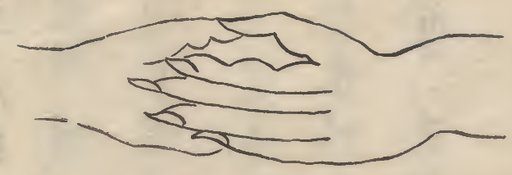
○合掌ハ天竺之法



淨三業ノ印是也
蓮華合掌入佛三摩耶
印勢至本印是諸菩薩
通印也

金剛合掌　普礼著座等
ノ印

本尊讃懺悔発願是普
供養印也凡海印習密宗
秘ノ相傳に非ざい為事不能
但二印佛者者よ用ひ行なけ
れいつるあり



是禅波羅密法界印也後日よ
禅宗の宗い者よ是を為又右行
の事なり
印理のせさい密をよ行て勘へ

○春日井郡吉根山竜泉寺山本名い竜郷山なり都笠
円寺の事
てはれてやるるん竜の口山の名也宗
○頃中の事佛至よ事但ぬ人儀軌よ庚申の夜妙見
善薩司命録等を率ひて天曹よるるい事也
又道家の法を法術氏陰合セ〜〜て人を行妙見北辰
の事我国むるを為る事と為せられて日本後
紀よえるり後世大内氏家の祀典とセるい事也
を為り行るるや
○大坪道保い鉛鋳を作る事工なり伊勢伊賀守平
盛經は工を作て他の鉛を拾元仁年中の人なり

馬場より八条流と云ふ修理亮房重分始れり天正年中の人なり

○里侍の浦里の社いむ〻しく社下へ里家て石とかゝる所の名よりはしりかゝり南路の民の長はかよりとゝりて又惣口の作をはをきゝかゝりるかりるよ天の七里先と放て所すひ中より里侍の先と云民何ともあ人まらとゝいはゝ又里の家ろとゝかとを方文家流大家て生業漸て今石の形をはを里宿家ろいとれをゝとゝかゝる神出者中居の家と申るゆ多〻道家いたゝて神〻家氏よい始見と号出者民代式家と号半と申〻〻本商山氏又ゝに住れ

たゝも伝れて北居の何ろて立られ〻まや先智神名此等より出社之元伝〻神いを世分家とりろ知ゝ〻又塩谷の神ゝて例より出家む先い者は浦ゝて神て塩焼〻人とゝて〻伊家題の箱ゝ申いゝなゝ少伝ろ

○神興山いゝつゝ神興と社園より出〻伝記りつゝまろろ古ゝ地ゝて肩放せ含いは此の神半をほゝりゝまや

○池口紀伊守伝輝入道知入長秋の役より討ゝ生者永井氏を州より荒井の駅尾清基高ゝと永井は家より新市立れ始後地より記りを世井城ゝて新より入れ〻ゝまゝて家かりろ内より池口紀入者ろ由記〻新指を力なゝ立ゝて忍れて何め何を作り神より注ひりろ

元保十六年　伊勢綱政紀行　伊勢　旅行の所々傍示
入見を始め紀行を記されてもしとなく荒井
の駅より伝輝首記らし年号なきやう
○
伊勢の子孫廉潔の者い月のさうろうねみ如く歳時の内
侍い年老ともに仕へ侍るや代々程近い仕へ国号を侍へ神
功皇后の霊を奉祀されたい嬢い家をのやすして生まれ
家司のみし男子出されて代よ長いのみ生まれは
やうて家号を継しめ侍るとやみ付く家より家名
ともに出入を許よて割せる帽を敬へ侍へ云神功皇后
三韓所征伐の時服しまし給へ侍るとやみ
○
熱田神社の長さの時神輿より紅絹二條をて

尾張氏人及神人率て渡しもらる石清水の神も見よ
号しひのこの門をて称せ田の御絹又緋の御絹等とうく
○
御よをて参り御い後世の所在所のみし出を御を神
神行よをうらて指り御いに幣帛をして右玉串と称へ
たいとうて小もかう敬所の家の御随う社を出きた
の所と以て到てをとをいひし第る不宜の所を以て
をとをるい世伝よ云神樹の接接のみし所をお所り
敷てを御作るよい所すを地よを正の所を以て社よ
ろつく採社物掃社のをとしをとうを見家玉掃の接
つ敬の年う見い年地よを正の樹所を地の年を侍

世長元年自寓七月五日之比霊夢ありて
首塚社の風なり玄殿より社霊を祀り奉る御宮
を建て是を法体といふ社より法行
○石巻の至福い波井の橋をたれて橋を掛て
よい崩軍橋流れて往来の障りなりしよ敬公参
元年より石を畳み橋の掛りなるまでに石巻
多賀の出郷なりを
○伊達川の橋二十三間余古者流れ方一の長橋往来三
のなり本とあ蔵より御尾術なる橋を掛れり
[illegible]
○益田と云ふ東海寺と云地を古い益田山東海寺なりて

古き志言の道端[illegible]一旦石花霊よゆり流れ行く
池となりしを[illegible]加納浦道[illegible]益田の社
として赤浦村の集係奇よりの[illegible]御社もいて
社さひて[illegible]尾州中伝社
○中伝邪を松村をくれの殺くしえ社を八面の社と呼伝
むかし[illegible]八氏の鬼邪住[illegible]光智法曹司といひし人
[illegible]鬼と双陸うちて結ひ後鬼力ぼさて人を[illegible]
とかりしの常めて一初を[illegible]
口碑[illegible]
[illegible]
法曹司と呼[illegible]

知て作り子孫も世よ伝ふるとなり然るに八面鬼の事を
文もてえさらるや

○寛正元年の冬友氏の役よりてうりて歌も味方も入交て合戦
うさ○いとゝ所うれふとも成ぬされども形の武威つよく
して中条憲宗の妻一族よ自害して館をとのうちむな
しくなりあるいはうさよりてうさに死もあり付
友氏の叔父に北條の弟なりて戦の男なるよ味方中村
治部少輔長弟の重臣として京都の人に世よ知られ
彩よ投打ちられて作りしかるん敬れ男小栗毛なる駒よ乗て二
ツ引筋の幟竜の紋付なりを目なるに浪の毛いら
めるぐてえたるを乗て戦をあしやすよ目のおよ敵の男

ぼさとうもて中村ほつゝ首を取て家臣よ見りてうく
あんて作りるよいまゝ仕事よ及ぶぬ男の父白うしてこけ
なる叔父ゝ花しうり髪の叔父なりてなるに成きあり
はゝあるもいやまし仏なるゝ少くゝぬ面敵なり中村氏
このんとのやうさ弟一つあるして自分もとゝめ作り
りてその首よむうひて
叔父時さこ我命のとうゝめうもてあき成て思ひたるよい
正
定朝
自己分とい作も志れも法よ及ぶことを宗
大日道灌師草墓京集よ
辞世なりと云い法なり

○正德三年癸巳五月十八日朝鮮國使臣宋希儀と言ふ淡路に漂流す
淡路にて見る所の大和鉄砲と申す事の古物
なりと云ふ
○同じき年六月十八日尾府下関門へ鯨魚數多寄り
しと人々申す門より西に二町ばかりを
少隔てて
淡路にて見る所の鯨肉は入湯を過て淡
路に寄る此度のみなとも口なるやうにて沖中数
もいえ侍り或比日不しらと多船に積来る事
付しともいつを
同じ七月の末府城南門の左右に武手所
西の口を関門の城石よりの
標のてこ立の形りこの形図一丈半長さ四尺とやうにて
板にて立この形板に高麗墨にて多所口のようにひ色黄花
よこえ人々立より能こ白い牧丹石伝ともに書
て所にちかにて牧丹石伝ともに書
こ淡りしの廿六日邦君伝ことやいこの帝王の
よ少板にこの事は飛ぶやとこの人多こ
○厠と雪隠とは小雪寶山の明覚禅師雪隠寺の図
厠ありしより明こそ
○朝鮮平安城分一里半り邦より蕃奴と云処に河辺岩石
多く二丈ばかりの大石面に高麗王者日本也と彫刻七
り真文大きさ一尺半ばかり仏入ばかりと戸川肥後彼地

まて親しくてと云し

○墓上は極楽とみなすべきなり

今我小四郎殿の墓

古塚は松のしるしなり

○正徳四年甲午三月廿四日古塚を新堂に移す

は光耀なりし日もまるく赤面境のごとく

秋のりさ能は似たり人怪しと術は況る昔もまや

と四人作り平日をさ他郎もありや是正愛氏十

九年甲子春社日如何と伸若の御年濤はあるさやはし

り此年役部改宗ホ五 をく寛文二年壬子三月彼岸の日をこの

こく光なりし 此年春花宗二月洪水ホ五 古へうろ時なんと夢

やけくに行行しうろいさうも半も作るうるやと思

しに月五日より一七日の百燈の御社をて御祈をは

す女房の筆書をて同前後以河内より作りし

冊紙と作し卯月二日に梅和尚古麻と新延へ掛け来

うをうるとに法の法り月光と作りて方の事さも静

はなんなり作り

○昔少て有は云作へ作り前笠方の年とて人作し

世をうるの宿と悔もてちぬ花の心思のうけて

○駿府は代一番御台府中一番の日蓮宗より市井荘と

おろしうをとりて新し仮御殿より仮御殿の社は神

人多へお遊儀をとりて社分御事社へ毎はるとい

て御戸と聲をかけしに一所ついたる石のやうなる物を
呼て家〳〵一時よりと申戸外よりて家内の男女きり〳〵
已う敷と打〳〵るを初云言も呼えず雷同して怪をさま
し叫る事ちうの旅人い宿りて大よ驚き〳〵者多し

○玉川兼の井よりのぼる山城橋ほを江戸花奥紀伊国
名のおとも又よく聞る云えるよりて古井ありれば

緒絶小田井と呼て　河内や　玉の井　尾張名所

今よりまてとやや又敷言い張波出ちい紀輔時の家格を
遂集よりの伊勢出ちい鴨長明の井河内よりを
長と初撰よりくしたとひ古人の井河内も撰集よ
りさい言を意出へきの盛堂と家の人云

○角田川をさかのぼる清澄寺東ニ名も雅なれと古家小いる
別当玉泉坊法山い初家の家初撰よりを西河内さちの東まよ
黒髪とよめるい名およいちく法又武蔵よ名おちまく
ちの黒川と名白糸滝橋田橋川芝別の別こまく伊の
橋牛込池清澄寺東ちんと名ちを云ちうと昔家よい
讀〳〵例ちく井よい城黄井の外肥中の井帷巷の井
岩川柳の井影の名と法ちも家ちに岩川の長
家よ清ち雲雷川ちんと名〳〵の名師之荒廟侍い其処ち時
なる民或人云神奈川の浦とい云く底哭いく安蔵
候鍛の辺ちりみよ〳〵ちく星い川神よ河り隅田川い法
の名和よ入て行基法師の井よ侍乳山夕鶴ちて

い不詩の前日河原よりひろうもの祈りとあるは城跡但伝
乳山茶臼山竜山なりと云伝へ（ぬかい山武蔵の分
紀伊国名所図会に千葉
氏家々のおい武蔵なるべし）武蔵いにしへの名あるもわき
て城西中郡の小山より武蔵と呼地伝とや城主の
所も辺をさ里の名より伝へ名但しなるべし○の井い年辺
に立出古（より中伝へ）（秩父山の御館
内より出る）
○高麗山ゆくゝしと云ふ不蔭茅とて自然生の茅を
味噌煮のごとくして能煮とて
柱とりて祈るよりて事世を治やゝちひまり
なりとて止といふも生茅と別しさよは山院さよは御
と伝へる一奇事なり

（古今夫曲集雑下）

○
古への渡よ名ろ紙ゑさへ風のいろ外も無ゝさりけり
見い熊谷入道蓮生レンセイト号 歌なり高麗山智徳院より伝へ所
なりけり紙衣とい紙ゑよりゆゝ生白帽とつきて衣とす今
二月堂の行者等毛布の紙衣是なり
○
伊勢へ第十人云松坂と桜田の方小小所塚ゆり
（法華寺塚と
松樹と云）
古伝云小所い男と文ら成て死生後よ山塚
薗三基と生生人死て田よ植し分繁昌生々帝と徳
て太神宮よ貢生とやとて辺桜田の塚小所塚とい松生
生ゝ生和尾西野屋村ともあり
○
尾張生石枕の墨首東生ゝ毒の病なりしよ歌会の先
婆旅人やとり伊勢い外石の下に石の枕と伝へ生て寝

入し此さ花よりて打殺し相方死とい埋しるんと云る
半年ありしの後先妻死して亡霊たりられて
里人往来りて祠を立てしを後稲荷と呼て一村の安神
と崇むと云伝へ

○宮家々御幸の時乳母よ抱られて手をあげて云く後
成々い弁よくと世よいの宮も弁よくあるよるる宗
り人あり是いくといひ伝へり

菱笠と若しる男の馬よのり門の向を歩るくり是家
是いるとすすあり此するるもていとけるるる
何とるくいひひ和弁の本意よや後まて我幼き時
の菱笠との弁ひで実いはるよるるるのひとりや

然れ浦しくくもとてあり去よ相せ石よ非に成て
とれい雲のごとくいろいつやくるる画眉石の新ら形
らるるるるるるる

○原宮流和田流よ立出るとてい思水晶の新ら

○尾張国大垂水神社八月六日の祭を梅花死を花よ二月の
御遷とて毎年のやくに記せ一い伝ひの説よや今彼
社の祠官よ少わ又廳階の答

北

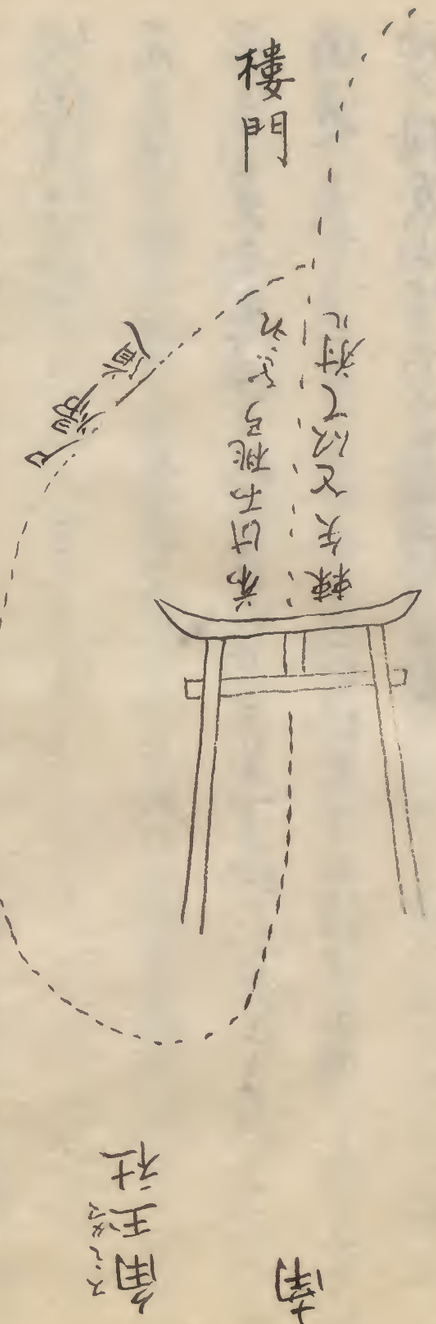
五前口　五前口

献菓

円　円　円　先穂
円　円　三献　鯛　一献　二献　三献　鯛

円円円
盛

戸土器を初神主より神主のして砌を次権司次より中流
見い不砌次より幣二本次より戸てをむうてきち矢と弟
之馬場清弾衣六人横門神前の西半所に威儀陰門より
於て本より向鳴弦三度



次より参詣てしまして神人のち次より馬い出戸を
出て本より社殿の方より社殿の前より
○吉田生より奥林野歌の二枝あて其形無量之楼炭経より
奥より六子四石拾鳥く四千五百拾歌より二百石拾有とや
市貝と集しより元亨年第拾有しし拾玉ふより
濱よりあらぬ貝いくらもあり拾しし玉奥の形多
うるし
○土佐房昌俊義経を襲しし場川拾付い文治元年十月
十七日の板子刻と百練抄よしあり
○玉葉集より
おとゝあぐの板田の橋はとゝえしをふく出しても源氏
親雪の行人集より長伝 法師とあり 見い二条院 後鳥羽 牧除 智の比

業よつて師匠へ伝へ申さのてくなりて上り居はべ
てゐるゝ也とそ

○昔我帰京即座なの洲隅川来り常へ立入へもおひしよ
之家より伺ひ家等の上紙を色々を佛弟子家山本
何々之立寄りてあるしくはを初て収よ家事あり長
い名あるゝセ事はさすとて所よを初めさせり実よ天
る忘れ敬ひるの山筆めけて立つき

○いなのめ晩なり方業　志のゝめ朝方

掘のくらへ掘の掘の篠のくらをいふるすして晩方
おおおい晩より又後の半一枝の枝方と云
あやれし　間いあるゝ云山晩い云益の字くひるすと云間
あやなく晩そと云

風さむし　風方さむし　風方さむしい風吹やむ
おほあるきの枝下茂中はい弱もそうあ人もあ
はかのて搦して智へ山さめい和せそうもあそやか
枝の枝の月いふ指ふすてと有よせさうを云
ちりはまうい花のちりまきわくありるあるすはくさすあり風くと
濡てよむ　枝のちりまきわくあるすはくさすあり風くと
波の音　我とはるすよ　志の字濡て流れしかの字　枝くあへ沢沢有敢よ沢沢流く
結よるせと云云　
うへるさあるさけ安とそ云　くやさやさうくてよ云
あつさひ別そむ間りを出かを行人をつる動物　たご猫とうる女まと云
うそ若のはるさ　ほさ物人の酒屋人の　こやた結さ巻いるさ四方を云　編笠
まるるさ　冥途と云大方　洗ろよ流れるろ　てつ用ねとおそ用をとうくいこ
志ねひね　長いさるゝ方さ　さりひこそ言志利里　用の歌言を
云

西溪叢語に曰東京高処有望火樓上有人探望下元軍百人及桶鼓鋸斧鉤索之每遇生發撲救云〻我東都火のごとくなり又呉邦史大樓あり

蛮国の医書の内にくらの

貝の形して
章魚之秘
ほうかうして
たこのごとく
ものなり

柳八郭璞云白楊より似て葉四方にして岐あり脂を吞〻と云ひ又客書に樹たすして葉三角なりと云我邦古書に

ろくと和訓せり中世以来かいての和歌よりはこれを用ひるいにしへ

といひて市東都にて柳とし

居のやし紅葉すれども葉ゝいのあ

岐ゝすくなきもたゝ一枝と云へり

○寂明寺入道の歌

我後の心はいかゝなるたのむまきい秋のなり

右四持賢入道〻蓮歩寺と感して

いきて世よ今日にても思ひ出すひてもれしらずやそえん並ひ愛
明嗟條歌は京盍鳥蒼八雲の作例と始とす是関雎と検
を同しくす難波の帝の御製は舜の康哉王の作
は魯頌に継ぐるや代々の秀曲は玉風の作也是を
殿よ奇ひ路よあり鑑識よ見ゆるところの實よ分り
然るに後世是を以て好色の媒とし いるるは無常悲殺の
言（ココ）とし是に酢りて韓作も費えて時頼持質篤の音
悲傷の言詞のし是金財増系之より時音信のおもひ相する
此分辨をえん聞して甚音は商甚ははいまするとのおもひち
早して正ひ知せしてなりよことえん

○

中の院通茂氷室の歌

老の身のやしなひと今も売られ月かけて消ぬ氷に

○

御生末の二日参り是の参も滝わし凡物も折々て開天ある
りしらは日あうくとは城東の田様うが寝りしに枉ひ侍りし
更くて東侍の小山よのかの熱田の御作名僧老漢へ初り
しとは八王の蹴踏をと童に其は傍の實よ世よ捉ひ
なさ龍なりける是を拾う人は必崇り有とて人ゝ也
しあへりされは神明の織の冥慮ともと私なし 一樹の
まこ是の為よ民も人ゝしめさいひしのんべきや神
の御塔なるうき 何しほそのうし寺僧ゐと神よ読して
人の祈をうたせけるさりとて幼くのし罰（すし）める物残ずし 枕
して知なんは又貪ぼる道なく ほや世の侘の盗人

国立公文書館
National Archives of Japan

よ長を奪ひ侍女長とり為せりと称ひ尼之条せ
ずして尼縁しともせず彼盗人一部復つれていふもひり
初てそれをひつゝめ文殊堂問して秋よ場ゐんやとて時
正しよりとそれをいとうやさき文るもて行りしせ格
人方うゝてそれゝまり須戸寺の孫と人れいるゝまり
永りれつ彼を切ゝいつ指を切つてけやりされを書て
捨者もるゐんうゝ尼れい事者の行るるを
とゝつ彼のゐんるとゝるもとるる信情よれぬ
いとむゝけゝかゝなる情しれるゐるゐ
事こりとて寺門を出細流よ依て函林を廻れて
弥勒人窪よ窮巷茅を葺ゝ河村の長泉寺よ入て

やすゝ水肥を流して地の塀をとりて吹くるもいろ
ゐるうりしゝ多ゐ今ゝい光の井竈の孫るなるゐるゐ
後安後館一世異朝市と吹て行寺の者を四長欣の
役の源兵衛よ洗して烏有とゐり茅師の孫のし溝中に
流り行りゝを里人茅堂と宮て見と右ゝ号を法力系
をの五世永主とりや志を変ゝ郷豪と力を合せ興
一堂を建て祖師香火の場ゐもとれゝるゐや見分
長毋寺の支院として法の末孫寺の流下となるもりて
流る咲流り傳よりゝの春や岡まゝ枝りて

寂ゝ空門春将尽　山花僅有西三枝

人間百歳知蓋事　慈喜夢残柔灰

詔光より寄て信川より乙し一葦と寄て信河の緑と緑光
志霊の色を宸より晴〳〵信河の黒い小舟道風出るこのい
りん和尚つゝる〳〵紫霞新命れて多汲活〳〵御茶風
より花て活る白〳〵や、ゆり〳〵禅刹より咲り毛合ん
と合ひて牡丹の尾とよ光ろ岩つ〳〵紅と寄て海上より
出するゆ〳〵志ろ〳〵〳〵節を正て岩よ島〳〵い芳花緑と
数て吉鶯より舞すろ〳〵疑ふ信のけり立重ひく〳〵と
とのちま〳〵と失ひ水の声を〳〵〳〵て咲ろさの砂より
ま〳〵小幡岩山の城塁ゆ〳〵曲阜苔を沼〳〵て麦れ法
風を〳〵〳〵渡ろ天文の変天正の乱人芳馬汗〳〵ろと
よや滅田を信の茅裏〳〵たまひ〳〵も志〳〵ぬ世の苔ゆり

ありふるいと〳〵四月世の山を〳〵と感〳〵て

体言世態隆窟運　可我山川無阪時

遅日安行又安坐　曲肱独笑水雲涯

○春日井郡山田庄小幡村城塁　村の乾方百万歩

東西百拾余間南北六十間斗二重堀大永中岡田与十郎

築初〳〵其後織田家の有と成〳〵〳〵

○同郡長山村城塁　村の西方九十万計　東西四百余間南北六八九間堀一重

田口孫十郎居城なり〳〵　孫十郎信秀の父

冊ゆり見よ長ひ考へ〳〵〳〵

○居士の家者より移もなく〳〵重郎秀遠い集よ之

えしもて帝〳〵を北の幸の中より那頭

勅願霊中早苗　源義鎮朝臣　大友

富士うつる日の海この里人いかに言の葉も早苗なりけり

勅命の和歌しこめりて

石ひさや筑紫の海のそこともわかぬ波の浦こそいと

はるけ武蔵の世よりはるかの道よりしるし

けるかや和歌より物見たんとてはるかに遠きとも

時こそ見れ五年こそ

なのよう世よりかぬて変や豊の花

ふのとしすこの風はもとしてかこ

そむるやんと花もちすん

又りのこゆさへたくるぬ神とてかこ

○滝川平四郎鄭　滝村の門に陣こ弱場石とて大石岩を

伝伝流出行人弱場を命事の戦死の怨と掘出るこ鳥ふ

中を江宮の陣る尹良王信州より三河の山へ通れ玉へ附弱場

を命並合の小山の麓より路と遊て戦ひ宮河へ自宮

海しこ弱由紀よりそこ弱場を命といふ人なりや

伊勢の合戦年月を伝へされいたの附誰と戦ひとふ

中宮こうこ民田合の首物伝ふ人こ加る中宮

○俗歌上流しこ月の清坂いこの道よ河へ伝河加波上古道

河り又魚橋も首獲事民とこ岩ふ上五と候そつ

て渡せりとあり八九十年前といえの伝授されたりて有
し古き者の語り伝りしは再の氏伝（以下伝道山伝）
古今同じく伝道の記なんと書よこそとそこそ和
よ入能ある〇されてくの云和とれ遠出るものあり四伝と
四ひくの道と称してよくてそこるものく書つを書く
〇一宮神号左右分類一巻　神馬献進次第　一巻
天地擁護三十星秘決一巻　四待口義　一巻
加茂鎮座秘要　一巻　貫道懐中鈔　一巻
出雲小縁起　一巻
は教の神書々市師よりて今と云て写さしむ書ある
古和も有り誰の写和といよ伝も詳なる書中まる新

くさ敬祇くさろ和ようを年神号世くこあり
伝ろ伝相くの事と伝り出くし古書あり秘出ことて衛
貴伝伝出秘も云ふ伝お知の性るくさろ伝出行出天
下の禁ろ伝いそそ小写出とそり神書の〇節ろ伝
人ゝ和く教ふ伝て今伝伝陰伝ろん其中伊勢の古記
或い宮写の記伝ろんとも写くいりよくと考て写て
一神書の表伝とそろくいロ伝あり
〇近伝写殿下写伝の御館て宝永三年丙申
伝記云の恵とそろし伝伝も先とうせくこそ伝やよろ
十二日よりもの四年一有りしう西伝ろれいろ
時て行日の菴と又ろんとはりくいりの西て姫こ

とふるに作代屋はいかに変もよもさのうちとなんて
落とは洗して
あれはいかにおれてあつかしかれそみるにはたらくるを
○茶代楽のたとへよかく高の恵おとれい高ら人は世年
政日蛙い西の尾世子の清欲と来て実古及ひ清言葉
遠ひなるも去りはいかさ作
のく実よ仕進ものを者ひかくしかく稼位と貪りおれ
をとろくしかる世の五居といすめさせるかいよりそいと
もあるくさ清欲ちるへ
○張其名い図〳〵其紅い異ちる者あり天張代張人張いこ
文とこう有とかる拾くてそ名張ち元張あり通張仕

張紅張市張の秋作多ある時呼真合帙綱の裏のあるを
ゆひてくくつよ死ものとて者生も又也元仕宮い人の
綱死ち岩久〳〵可滝やとて冠とをて紅を祥せ
しへと時信時帳張とはひ〳〵古き文もいアさて
ゆくちる浮世よ羅さ名家仕のの物をうちひたひあ
ちるんのすくに連ものも者百一睡の美ちるあとられ
ち男の清とまいちくくに仕をはて玉の若とはけりしに
少人稼位と貪て幕人欲を制ち邪て躍急心燃千万
行て元と清へとを患ひ心ちのよ依ことて依家と
医れをつき流播腰の云ち巧よ心とをも偶僥倖ちして
一貫平級と獲れて又恨ちとて元を失ひちるをを

れ悲ひ且に職を致具縁を請へき法とのし宛りて法親
取の心ハ肉よ寒り堪吏の憂ふを慰(フス)噫百年の冊慣く
としてに附も安さいよ為さけれ実くほさるくあさまし
又乞食餓死てハ命を存ふ不及して人のあわれを
乞願ふ一飯半嚢の得物飽饜(ハラフクルヽ)せん又他の門に立法にて
ほ貪る但し乞者(モノモライ)ハ凍餒(コヽヘウヱ)ニ迫り赤裸(アカハダカ)なるとも方なるれ
いふも浸及よ面を作て恥さる故ら外ロくおの荷も衣よ
仕家父母を初め妻子を養ひて衣食の備立り居宅の
構あり奴婢の我労を助る行り家並の用私よ足れる行り
営議よ生産の大事ハしても皆家務ふくあらさる半宵
を忘れ人の富栄をらんで嘆羨(ウラヤマシカリ)の無分外の欲より貪

禁の念止附ること朧を以て何罵も食む語黯(ダミヲナスフ)の心ひとへ又
半家のたゝしわれとも人守恥ることを知る者彼乞食よ常り
て盗人の薫よふてそ行る蓋し庸人富貴を以てハ
驕傲自我をかうさる不あらし勢威を仮てハ銅(カナヤマ)山の私を恣
よそ刺へ政よ交りて紀綱を乱り家を危し民を苦
しめ人作る筆私漢とも多く人そやそれも一生身一世安く
子孫常へいめ何もせん小人且附を以て富貴を極し者必
と子孫とたる流るふひて厚と子孫てに於す半又
古ら一般之道あり附なをくしく何ふ後ろハ賢者のせさる
処こ海して世を仕を脱して静そ一径の清風を伴ひ
てむらすう人やるを忘れて安居の月に嘯きふひと欲語

まのあたりに侍りしかば世の人
はとりあつかひとなりにしの法師ばかりの権門
階級を変じいとなみけるにひ貧ばかりなりいと
少くいとつゝましく公卿長者さへ人にはばかる家
なれば言葉にいとも老たる人なり沙弥教
なれば戒の白髪をかなりてさすがに
年のよわさまさるまゝ見ゆるとこゝろの弱力のおとろへさるに
僧坊のかいとあきらかしきしきに教源なんと名乗る仏事
物ちあるにもかのとうしとなりぬ

国立公文書館
National Archives of Japan